

ボランティア関係者ネットワーク形成セミナー

青森会場 平成30年11月27日(火)青森県総合社会教育センター	参加者 18名
弘前会場 平成30年11月29日(木)弘前市民会館	参加者 17名
八戸会場 平成30年12月 4日(火)八戸市総合福祉会館	参加者 16名

ボランティア関係者ネットワーク形成セミナーを、青森・弘前・八戸の県内の3会場で開催しました。講師の岩手県立大学 社会福祉学部社会福祉学科 コミュニティ福祉系 准教授 ^{かんの みちお}菅野 道生 氏 には、全ての会場で、「人が集まる組織のつくり方～ボランティア活動の活性化を目指して～」と題し、ボランティアに来てほしい運営側のニーズとボランティアに来る参加者側のニーズのマッチングを意識しながら、企画・運営することの必要性について、御講義いただきました。また、それぞれの会場において事例発表も行いましたが、参加者や事例発表者が相互に話し合う演習も取り入れながら、テーマに沿った充実したセミナーとなりました。

1 講義・演習「人が集まる組織のつくり方～ボランティア活動の活性化を目指して～」

※講義の内容につきましては、基本的に3会場とも共通したものとなります。

(1) 活動上の課題について（「活動上の困りごと」や「どうにかしたいこと」）

まず、グループ内で進行役1名、その他のメンバーは盛り上げ役と、それぞれの役割を決め、A3判の用紙に「4つの窓（①お名前 ②団体名 ③団体・活動の目的と主な活動内容 ④活動上の「ひと」をめぐる課題、悩み）」を書き、それを使って自己紹介を行い、課題について意見を出し合いました。「ひと」をめぐる課題としては、「会員数の減少・後継者不足」や「イベントの周知・効果的な集客の方法」等が挙げられました。



講師 菅野氏

(2) なぜ「ひと」に来てほしいのか？なぜ「ひと」はボランティアをするのか？

次に、模造紙を縦に半分に折り、片面には「あなたの団体が新たなメンバーを必要とする理由」を付箋紙に書いて貼り、もう片面には「人はなぜ、何を求めてボランティア活動に参加するのか。」を書いて貼り、模造紙を広げて両面を見比べながら話し合いました。新たなメンバーを必要とする理由として、「活動を普及・継続していくため」や「新しいつながりを持ちたい」、「考えや時間の共有」等の意見が挙げられました。その一方、「なぜ、ボランティア活動に参加するのか？」では、「達成感を味わいたい。」「何か人の役に立ちたい。」とボランティアを必要とする側のニーズと必ずしも一致するものではないことが分かりました。



菅野氏によるワークショップ

そこで、運営者と参加者の双方のニーズを満たすための方策を話し合い、両方の立場から人が集まるためには、「人は活動に参加する中でボランティアになる」ことや「活動仲間は、計画的・意図的につかまえて、育てるものである」というボランティアマネジメントの大切さを御教示いただきました。

【関わり続けてもらう：人が続ける理由】

①楽しさ ②無理のなさ ③仲間 ④役に立っている感（自己有用感）⑤成長の実感 ⑥活動に対する「誇り」 ⇒この逆の状態になったとき、人は関わることを止める。

【関わり続けてもらう：うまくやっている団体は】

①「報酬」（≠お金）をしっかりと払い続ける ②団体内での人材育成プログラム

(3) まとめ（人が集まる組織になるために必要なこと）

最後に、「人」を集め、関わり続けてもらうためには、

- ① 「相手の求めていること」を知ること
- ② 相手の求めていることと、活動内容を一致させること
- ③ 浅い関わりから、深い関わりへ

（始めはお客さん⇒サポート⇒メンバー⇒コアメンバー⇒リーダーへ）

⇒人材の「マネジメント」のしくみを組織が持つことが必要となってくる。



各会場で演習に取り組む参加者の様子

2 事例発表**【青森会場】11月27日（火）「お助けマンクラブの活動」～市民団体だからできること～**

事例発表者 お助けマンクラブ 代表 ^{まつえ のりこ} 松江 法子 氏

松江氏からは、お助けマンクラブの会の設立までの経緯や、会を知ってもらうための交流行事、子どもたちの自立を視野に入れたサポート事例などを発表していただきました。子どもの就労を目的とし、「どうせやるなら本物を楽しく経験させたい！」という思いが、米軍基地の方や地域の方々と交えての息の長い活動に繋がっているということなど、有意義な事例発表となりました。

「お助けマンクラブの活動」について

- ①目的：健常者と障がいを持っている方とのふれあいの活動のため、障がいの種類・有無を意識することなく一緒に活動しながら、お互いを理解し合えるような行事を行い交流している会
- ②会の流れ：平成16年2月に三沢市社会教育関係団体認定
- ③主な活動：平成10年8月より「三沢まつり」みこし部門に参加
餅つき大会（他団体・世代間交流）、ハロウィンのかぼちゃ作り
平成20年より米軍基地内スペシャルオリックスに参加
- ④目指すこと：障がい者が街に慣れるのではなく、街が障がい者に慣れる。地元の子は地元で！



事例発表者 松江氏

【弘前会場】11月29日（木）「住民主体による地域福祉活動（ボランティア）の取り組み」

事例発表者 藤崎町社会福祉協議会 主査 ^{なりた ともゆき} 成田 朋之 氏

成田氏からは、藤崎町社会福祉協議会でやっている住民ボランティアが主体的に運営・進行を行っている脳トレ教室の事例や、自分たちの地域で自分たちによるサロン事業について発表していただきました。また、「生活意欲低下から閉じこもりがちになる高齢者」に目を向けた取組を通じ、世代間交流を念頭に置いた地域課題を解決したいという熱い思いを伝えてくださいました。さらに、菅野氏とのトークセッションを通じ、成功体験を積みながらの人材育成のパターンや社会福祉協議会としての支える役割など、受講者の実践にヒントとなる大変有意義な研修となりました。

「住民主体による地域福祉活動（ボランティア）の取り組み」について

(1) 訪問型サービスB（有償ボランティア）

- ①サービス内容：屋内清掃、洗濯、買い物代行、ゴミの分別やゴミ出し、簡易な作業
- ②支援員の確保のため：生活支援（訪問サービス）担い手養成講座の実施

(2) 通所型サービスB（脳トレ教室）

- ①目的：「楽習」を通して、認知症状の改善や予防に努めるとともに、教室に通う仲間やサポーターと交流することで、生きがいや楽しみを見つけての閉じこもり解消等

- ②内容：簡単な読み書きや計算、運動、体操、間違い探し、トランプ等

(3) 一般介護予防事業（ふれあい・いきいきサロン事業）

- ①目的：住民による住民のための『居場所・交流の場』として顔なじみの輪を広げ、地域の人とのつながりの中で「生き生きと安心して生活」することを目指す活動

- ②経費：5人以上参加し2時間以上活動すれば、1回3,000円の補助金を交付

- ③活動内容：健康講話、体操、頭の体操（脳トレ）、軽スポーツ、カラオケ、折り紙、茶話会、昼食会等



事例発表者 成田氏

【八戸会場】12月4日（火）「～懐かしの学校「駅ナカ学校」～「駅さいぐべし！」

事例発表者 駅ナカにぎわい空間実行委員会 会長 ^{なつはら}夏原 ^{けんじ}謙二 氏

夏原氏からは、駅ナカ学校がワークショップからスタートした経緯や人を引きつけるネーミング、駅というオープンスペースを利用した見える化など、斬新な発想を中心に説明していただきました。さらに新たな試みとして、認定こども園や小学校との関わりを通し、世代間交流という新たなつながり方のヒントを御教示いただきました。

「駅さいぐべし！」の活動について

- ①目的：ずーっと住み続けたい町づくりを目指して誰でも気軽に集える場に
- ②期間：毎月第2火曜日10：00～11：30 ※8月は夏休みです。
- ④活動内容：みんなで集まって話っこして、体を動かしたり、笑ったり。それだけで心と身体の元気が生まれます。新しいものに挑戦することも楽しみ。
- ⑤会場：津軽中里駅（オープンスペース）での開催のため、通行する人や旅人、時には有名人も交えて交流できる。
- ⑥ポイント：企画から自分たちの考えが反映され住民主体であること。何をやっているかが見えること。大人になってからも学校へ行ける体験。



事例発表者 夏原氏

3 参加者の感想 ※青森会場…（青）、弘前会場…（弘）、八戸会場…（八）

- ・ボランティアを求める自分の気持ちとボランティアに来る側の気持ちの違いをはっきりと自覚しました。（八）
- ・段階的に育てていくこととボランティアマネジメントという視点を学び、今後に活かしていこうと思います。（八）
- ・これまで自分達で悩んでいた人集めや後継者の育成についてのヒントが得られました。（青）
- ・実際に直面している問題を発表され、実感がこもっていました。（弘）
- ・駅ナカ学校に興味があり、ぜひ話が聞きたいと思って参加しました。住民主体で運営し、とても素晴らしい事例だと思います。（八）